

**高齢社会における鍼灸マッサージ療法を裏から支える仏教哲学
ー介護予防を通してみる視覚障害者・晴眼者・高齢者の共生への提案ー**

介護予防マネジメントコース

5010A334-1

本川 晃市

研究指導教員

岡 浩一郎 准教授

I 序論

1. 研究の背景

鍼灸マッサージ療法には、2つの異なる役割を担ってきた伝統がある。それは、江戸時代より視覚障害者の職業自立を担ってきたことと、奈良時代に中国より伝来した療法として予防を重視した健康支援を担ってきたことである。

ところが、視覚障害者の職業自立という役割に大きな変化が生じている。たとえば、視覚障害者の職業と思われていた鍼灸マッサージ療法への晴眼者の進出が激しく、もはや視覚障害者の安定した職域とはいえない状況にある。その反面、現在の鍼灸マッサージ業界は、予防を重視した健康支援には大変に熱心である。とくに、介護予防については、健康長寿や治未病の理想を伝統にもつ鍼灸マッサージ療法の長所を生かすことができる絶好の機会として、大きな期待を集めている。

2. 本研究における問題提起

何らかの疾病や障害を抱えて長らく生きる人が多くなる高齢社会では、健康維持・増進への支援だけでなく、疾病や障害を抱えて生きる高齢者への理解も必要であろう。そして、この前向きな理解を得ないまま、鍼灸マッサージ師が介護予防に従事したなら、高齢者を弱く可哀そうな存在と決めつけたり、あきらめや失望で終わったりすることにも成りかねないと危惧した。

3. 本研究の目的

あきらめや失望で終わる理想を掲げて、日本の約1500年にわたる伝統医療の一翼を担ってきた鍼灸マッサージ療法の歴史を形成できるはずがないだろう。そのことから、鍼灸マッサージ療法

のなかには、疾病や障害を抱えて生きることへの前向きな理解があるものと推察した。そして、この理解を確認しないままでは、鍼灸マッサージ師として介護予防において十分な責任が果たせるものではないと考えた。

そこで、仏教哲学を通して、日本の鍼灸マッサージ療法がもつ自然思想・哲学のなかに「疾病や障害を抱えて生きることへの前向きな理解」があることを明らかにした。また、そのような自然思想・哲学をもつ鍼灸マッサージ療法にふさわしい介護予防への貢献を、視覚障害者と晴眼者の関係を交えながら検討した。

II 本論の要約

社会のなかある高齢者は弱い存在という固定観念は、その大部分が事実と反することが証明されてきた。この事実が示すような自由闊達な老人像をもつ中国医学古典により育まれてきた鍼灸マッサージ療法は、ポピュレーションアプローチに適していた。ただし、その介護予防のなかで健康長寿や治未病の理想を掲げるだけでなく、高齢者が疾病や障害を抱えて生きることへの前向きな理解も、鍼灸マッサージ療法のアイデンティティーのなかに確立していくべきだと考えた。

たとえば、中国医学古典が仏教とともに伝来した様子や仏教が古くより終末期医療に携わってきた歴史から、鍼灸マッサージ療法のなかに仏教に影響を受けた理解があると推察した。また、仏教哲学・終末期医療思想・リハビリテーション思想上田やE・Q・ロスらの研究から比較すると、この3者には共通した喪失体験への理解と受容があることが分かった。そして、仏教哲学が疾病

や障害を抱えて生きることへの前向きな理解を、鍼灸マッサージ療法の伝統なかで担ってきたことを予想した。

このように鍼灸マッサージ療法の、自然にみる生命への喜びから病になるような悪い生き方を戒める道教哲学と、老病死にみる苦しみから病によって失うような価値観に寄り添って生きること戒める仏教哲学という 2 つの理解をもつものと推察した。そして、道教哲学の個人をみる中庸と仏教哲学の全体をみる中道とが表裏となって作用することで、鍼灸マッサージ療法が正当な医療として成り立ってきたことを理解した。

また、鍼灸マッサージ療法に従事する視覚障害者は、リハビリテーション思想に基づく教育を通して、仏教哲学と同様の前向きな理解を学んでいると推察した。そして、この視覚障害者が高齢者の喪失体験に寄り添いながら健康維持・増進を支援できるなら、質の高い鍼灸マッサージ療法がおこなえるものと考えた。さらに、高齢者の喪失体験への共感的理解には、鍼灸マッサージ療法が介護予防に貢献していく鍵があると予想した。

ところが、現在の鍼灸マッサージ療法は、視覚障害者の安定した職域とはいえない状況にある。この視覚障害者の窮状をルソーや老子が説く「自然」からみると、視覚障害者と晴眼者の間にある人権は自然なものではなく、社会の制度により矯正された「偽」の配慮だということが分かった。そして、この人権が自然なものでないゆえに、鍼灸マッサージ療法という営みを通して共に過ごすなかで、冷たい対立が生じるのだという解釈を得た。さらに、ここが鍼灸マッサージ療法の誇るべき「自然」に対する我々の理解不足が、最も脆弱に、象徴的に現れている箇所であり、疾病や障害を抱えて生きる患者に向き合うための哲学を自らの療法のなかに確立できていない鍼灸マッサージ業界を反映するものと理解した。

そのことから、人間にみる高齢や障害という違いを「あるがままに」受け入れる理解を鍼灸マッサージ業界のなかで形成していくべきだと考えた。そして、社会の支配的な価値体系や固定観念に束縛されることもなく、人間にみる違いを自然

に受け入れる「あるがままに」という理解にこそ、道教哲学の無為自然と仏教哲学の涅槃寂靜の教えを表裏にもつ鍼灸マッサージ療法らしい介護予防への貢献があるものと考察した。

III 結論

中国医学古典より育まれてきた自然思想・哲学のなかには、養生に心掛けて病を予防しながら健康やかな長寿を願う道教哲学のほかに、疾病や障害を抱えて生きることへの前向きな理解を担う仏教哲学もあることが分かった。そして、この 2 つの哲学が表裏となり、一切の区別や隔たりのない自由と平等にこそ人間、そして社会における幸せの源があることを、鍼灸マッサージ療法を通して論ずるものと理解した。その理解なかで、鍼灸マッサージ療法を業とする視覚障害者と晴眼者の間に生じている軋轢から、自由と平等を保障する根本にあるものを推察した。そして、この推察をもとに、自然思想・哲学をもつ鍼灸マッサージ療法にふさわしい介護予防への貢献として、「健康長寿と治未病の理想」だけでなく「視覚障害者・晴眼者・高齢者が区別なく共生する自由な社会の理想」をも掲げながら、鍼灸マッサージ療法のなかで介護予防の輪を広げていくことを提案した。

IV 評価

本論文は、晴眼者である筆者の視点から介護予防に参加する鍼灸マッサージ療法の理想を考察したものであり、視覚障害者の意見を直接的に反映したものではない。また、高齢社会のなかで共に生きる「意味」を問うているが、視覚障害者と晴眼者が協力しながら鍼灸マッサージ療法を通して介護予防に貢献していく具体的な「方法」を示すものでもない。ただし、鍼灸マッサージ療法が掲げる理想を高齢社会のなかで成すためにも、晴眼者の独善的な視点からではあるが、鍼灸マッサージ療法を育んできた自然思想・哲学の源流に立ち返り、その理想とする「意味」を確認することには十分な意義があったものとする。そして、その「意味」のなかで、視覚障害から「しかたなく」鍼灸マッサージ療法に進学した生徒・学生が、鍼灸マッサージ療法に従事することに誇りを持つことができればなによりである。